

伝説に包まれる岩槻城(後篇) 江戸から明治の廃城まで

目まぐるしく変わった城主

岩槻という表記について、前篇では『岩付』と記していたが、後編では『岩槻』の文字に統一する。一般的に『岩槻』となったのは江戸期の元禄時代からのことで、それまでは『岩附』や『岩築』、『岩月』など様々で、時の文化人が風流に任せながら当て字として、これらの文字を使っていたらしい。さて、豊臣秀吉の小田原攻めとともに、落城した岩槻城はその後、関東に入封となった徳川家康の領地となり、徳川譜代の9家24人が目まぐるしく城主を務めた。この城主の代数には高力、青山、阿部、板倉、戸田、松平(藤井)、小笠原、永井、大岡の9家25代と数える説もあるが、阿部家の城主時代に藩祖の正次が大阪城代として赴任した時に、長男の正澄がその留守居役として城代を努めたものの、家督相続前に病没。他家に養子に出ていた次男が戻り、家督を継いで阿部家2代目の城主になっていることで、正澄を城主として含めるか否かで歴代の城主数に違いがある。

家康の関東入封から、埼玉県内にはこの岩槻城をはじめ羽生や松山、深谷、本庄、鉢形、騎西など後北条氏の旧支城があったが、江戸幕府創設後の1615年(元和元年)に一国一城令が出され、鉢形城や騎西城などが廃城とな

り、岩槻と川越、忍の3城だけになった。このうち、川越城主は松平家が代々世襲し、言わば創業者一族で占められたが、岩槻城主は幕府内での出世頭が入城する地位に位置付けられている。つまり、権威づけとか格付けの居城として、要職の人が城主となったことから、目まぐるしく城主が交代したのである。そのため、最も短い板倉家で1年、最も長い城主家が大岡氏の8代115年で、幕府内の地位も奏者番から寺社奉行、老中へと出世していることで、『老中の城』とも言われるようになった。

初代城主の高力清長は、家康の三河時代で3奉行の一人だった人物で、もともとは平安時代末期の源平合戦で活躍した熊谷直実を祖としている。後に、三河国高力郷を本拠に家康の祖父松平清康の家臣となり、清長は広忠・家康親子に従い、数々の武功を挙げて2万石の所領で入城した。落城後の城と城下町を復興させ、後の岩槻城の基礎を築くが、清長の没年にはちょっとした謎がある。市内浄安寺の墓碑には『慶長五子年十二月廿六日』とあるが、幕府や高力家の公式系図類などの命日とは異なっている。『諸家譜』や『東照宮御実記』には慶長13年正月26日、79歳で死去とされ、さらに川口市の臨濟宗長徳寺の住持竜派禅珠の著した『寒松稿』には、慶長9年2月26日没の79歳と3つの没年がある。なぜ、没年が3通りあるのか、未だに不明と言う。

高力家の城主は2代(1590~1619年)で終わり、代わって青山忠俊が1619年(元和5年)に、3万5,000石の常陸国江戸崎城(現在の茨城県稲敷市)から1万石を加増されて封ぜられた。青山家も三河譜代の家柄で、忠俊は3代将軍家光の守役を務め老中にも列していた。しかし、岩槻入城後わずか4年で失脚してしまう。上総国大多喜城(現在の千葉県大



岩槻城初代城主の高力清長が葬られた浄安寺本堂

多喜町) 2万石に減封され、さらに改易蟄居を命じられるが、その理由が幕閣での権力争いに敗れたとか、家光の勘気に触れたとも伝えられ、真相は不明のまま。岩槻市史の編纂業務に従事したさいたま市職員の飯山実氏は、「家光の勘気に触れたことが失脚の原因」だと読む。「家光の養育係かりだったことを良いことに、常日頃から諫言が凄まじく、もろ肌を脱いで非を諫めている絵が残っている。そのために家光から疎まれ、最後には蟄居の憂き目にあったのだろう」と推理する。蟄居後の青山家の子孫は、丹波国篠山(現在の兵庫県篠山市)の藩主として明治まで存続した。ちなみに、東京・青山の地名は、この青山家の江戸屋敷があった所で、青山通りの北側に宗家、南側には分家の下屋敷があったという。

妖艶の伝説が残る時の鐘

1代4年で終わった青山家に次いで城主となったのが阿部正次で、奏者番そうじゃばんから大阪城代へと出世した。阿部家は5代57年(1624~1681年)の間、城主として岩槻を治めるが4代目の正春の時代に、今も残る時の鐘が鑄造されている。時刻を知らせる時の鐘の起源は古く、朝廷に貴族官人を呼び集める合図のために撞かれたのが始まりという。『続・埼玉の城址30選』(埼玉新聞社刊)の岩槻城によると、「徳川家康の時代には城内で太鼓によって時を知らせ、2代将軍秀忠の時代になると最初は城中で、次に広く市中に、その後各地の寺で鐘により人々に時を知らせるようになった」と記されている。江戸の城下町での最初の鐘は本石町(日本橋3丁目)に設けられ、後に浅草や本所、芝、市谷、四谷などにも設置、町全体に聞こえるようになったという。

岩槻城下でも1671年(寛文11年)に、正春が鍛冶職人の渡辺正次に鑄造させ、渋谷口(現在の本町6丁目付近)の楼に鐘を吊るし、一



お国伝説が残る時の鐘。今でも一日3回鐘の音が区内に響き渡る

刻(現在の2時間)ごとに鳴らしたと伝えられている。その後、鐘にひびが入り音色が悪くなったことから、1720年(享保5年)に時の城主だった永井直陳なおのぶが江戸の鍛冶に改鑄させたとされるが、何故か永井家の家譜にその記録が残っていない。前出の飯山氏によると、「城の土塁など細かな修復工事の記録は家譜に書かれているのに、時の鐘の修復について何も残っていない」と話し、「永井家の城主時代には鐘の鑄掛け直しを行っているはずだが、文字に残っていないのが不思議だ」と首をかしげる。

ただ、こんな伝説が時の鐘には残っている。初めて鐘を鑄造した時か、鑄掛け直しの時は定かではないが、渋谷の鑄物師の末裔で斉藤鉄翁が時の主君に命じられて、時の鐘を鑄造することになったが、高齢のため完成させずに死んでしまった。後を引き継いだのが一人娘のお国で、なかなか満足のいく鐘が出来上がらず、いつしか目を吊り上げながら髪を振り乱して鑄掛けした。その形相はあたかも蛇のようでもあり、狐のようでもあったと言う。苦勞の末に鐘を造り上げたが、いざ撞いてみると怪しげで妖艶な音色が響き渡り、やがて鐘にひびが入り音は汚く濁ってしまった。実は、蛇か狐の魂がお国の心の中に乗り移り、鐘の中に鑄込まれていたのである。お国は心の迷いを消し去るため身を清め、一心に神と

仏に祈りを捧げて造り直すことを決意。城主の奥方もお国のためにと、代々伝わる家宝の黄金や櫛、髪飾りなどを献納しては鐘に鑄込んで協力した。その結果、完成した鐘は形から光沢、音色まですべての面で完璧なものとなり、今も時を告げているという。

岩槻には古くから鑄物師が存在していて、現在でも時の鐘を鑄造したと言われる齊藤家や、東京在住の子曾川家の子孫が残っている。中でも齊藤家の祖先は、技術力があって奈良の大仏建立の際には全国の鑄物師とともに関わったが、その優秀な技術が盗まれ大阪・堺で殺されたうえ、亡き骸だけが岩槻に戻ってきたという言い伝えもある。お国の話は、後世の人々が創作した、全くの作り話のようだが、岩槻の時の鐘は1787年（天明7年）製造の上野寛永寺の鐘よりも古く、忍城の鐘や川越の時の鐘よりも歴史があり、現存する江戸時代からの時の鐘では最も古い鐘だと言われている。ただ、家康が江戸城に入城した1590年（天正18年）から明治の初めまでに書かれた地誌『武江年表』には、さらに古い時代に鑄造された時の鐘の記録があり、断定はできない。それでも今から10年ほど前までは、手で撞かれていたそうで、現在は機械仕掛けで朝夕6時と昼正午の3回が区内に響き渡っている。

板倉のお家騒動と束の間の城主たち

阿部家の後に城主となったのが板倉重種で、5代将軍綱吉の時代に老中となり、下野国烏山城（現在の栃木県那須烏山市）から1万石加増されて6万石で入封した。しかし、わずか1年足らずで突然失職し、1万石減封されて信濃国坂木城（現在の長野県埴科郡坂城町）に転封されてしまう。何が起こったのか、諸説あるものの残念ながら未だに判然としない。板倉家のことを記した『板倉御歴代略記』に

よると、「御家の一大騒擾いちだいそうじょうにして記載するも恐懼きょうくに堪へざる次第、…」云々と、その顛末を明らかにせず、騒ぎ立てる（騒擾）ことは恐れ多いことと（恐懼）しか書かれていないため、何があったのかは不明である。

ただ、備中庭瀬藩士の川村半兵衛なる者が、家中の出来事を密かに内輪で語ったことを“留書”した『御家密書』が残っている。それには、板倉家に跡目争いの御家騒動があったことを伝えていた。重種はもともと他家に養子に出されていたが、長男の重良が乱心したとして廃嫡されたことから、実家に戻って板倉家を継いでいる。その時、すでに重種には重寛しげひろという長男がいた一方、廃嫡された重良にも重宜しげのぶという子がいた。重種としては自分の子、重寛に家を継がせるつもりでいたが、この方針に異を唱えたのが重宜の実母の盛久院。盛久院は家を継ぐのは重宜が正統であると主張、母子は夜陰に乗じて屋敷を抜け出し、備前岡山藩主の池田光政の屋敷に走ってしまう。実は、盛久院は池田家の別家である池田恒元の息女で由緒ある家柄。江戸幕府の親藩で力を持つ光政を通じて、重宜を正統とする板倉家相続変更願いを幕府に申し出たことから、重種の責任が問われ家事不取締役を理由に失職した、と伝えている。

別の説もある。重種は、徳川光圀（水戸光圀）が5代将軍に推していた、甲斐国府中城主の徳川綱豊（後の6代将軍家宣）を差し置いて、館林城主の徳川徳松を世継ぎとして西の丸に入れたことから、幕閣内での権力争いに巻き込まれて失脚したというもの。しかし、これは徳松が後に5代将軍綱吉となっているため、権力争いを理由とする失職や失脚には当たらないように思われる。それよりも、板倉家の相続争いを発端とする方が筋に通るようだ。いずれにしろ、御家断絶にもならず重種は蟄居となり、長男の重寛が上総国と三河

国の領地に5万石を受領し、従兄に当たる重宜にこのうち2万石を分与している。さらに、重寛は陸奥国福島に転封となり、板倉家は3万石の城持ち大名として明治維新まで続いた。先の川村半兵衛は、重宜の養嗣子となって後を継いだ庭瀬藩初代藩主重高の家臣。

今に残る黒門の謎

板倉家が去った後、岩槻城主となったのが戸田忠昌で、5代将軍綱吉からの信任厚く老中に任じられたのを機に5万1,000石で入封した。わずか1代4年の岩槻在住で下野国宇都宮藩主に転じ、その後に城主をなつたのが藤井松平家の松平忠周ただちか。この藤井松平家というのは、徳川家康の4代前になる松平長親の5男利長を祖としている。三河国碧海郡藤井（現在の愛知県安城市）を本拠としていたことから藤井松平家と呼ばれ、子孫は上田藩に定着して明治維新まで続くが、忠周の岩槻城主は1代11年で終わった。

この時代から現存する遺構に、木の部分が黒く化粧された黒門がある。埼玉県庁の正門として移築されたと伝えられる城門のことで、現在は岩槻城址公園内に保存されている。江戸時代に入って築城された岩槻城は本丸と二の丸、三の丸までであったが、忠周の時代に大

火にあって焼失、以後は三の丸を修復して御殿として城主が居宅として使用することになった。城門は本丸から三の丸まで3つあり、現存する城址公園内の黒門は一説に三の丸の表門と言われている。しかし、実際にはどこの城門かは定かではなく、明治維新直後の1871年（明治4年）に廃藩置県が行われ、三の丸に岩槻県庁が置かれたことから、必然的に三の丸にあった黒門と言われるようになったらしい。

岩槻県はその4カ月後に、戊辰戦争下で誕生した大宮県から名称変更された浦和県とともに旧埼玉県となり、岩槻城がそのまま県庁となるはずだったが、手狭などを理由に浦和県の県庁舎が置かれていた浦和宿の本陣が仮庁舎となった。しかし、伝承では「治政はなはだよろしからず」と、明治政府から注意を受けたのが最大の理由だったようで、前出の飯山実氏は「岩槻藩の剣術指南役だった藩士が城内の県庁舎に乗り込み、白刃を振って大暴れしたことをとがめられた」と解説する。

県庁が現在の県立図書館が建つ浦和に移ったことで、三の丸で使われていた黒門が移築され、県庁正門として使われたとされる。ところが、この正門使用説にも疑義がある。その時の浦和県庁には既に正門があったはずで、わざわざ黒門を正門にする必要はない、というのが一つ。明治期に撮影された写真には黒門が写っておらず、石の角柱があるだけで表門らしきものもない、というのが二点目。ただ、県立図書館の場所から、現在の県庁舎地に移転した時には、この黒門は行方知らずとなるが、大正期になって知事公舎の門に転用されていたのは確かだ。ちなみに、その当時は新聞記者の詰め所になっていたようで、1954年（昭和29年）に旧岩槻市に移譲され、市役所の通用門として使用された後、1970年（昭和45年）に現在地に移築されている。余談なが



明治初期の旧埼玉県庁の正門に移築されたという岩槻城の黒門（上）とその裏手



大岡忠光の墓所がある龍門寺本堂

ら、大火にあったにもかかわらず、岩槻城の城門は黒門のほかもう一つの城門が残った。ここだけの話、その門は今でも大宮区内の民家の門として使われ、黒門よりも立派な門構えを誇っているとか…。

藤井松平家以後、岩槻城主は2代14年間の小笠原家、3代45年の永井家へと代替わりし、最後の城主家となる大岡家へと引き継がれる。大岡家は家康・秀忠に仕えた旗本の大岡忠吉の4男、忠房を祖とする家柄で、同時代に活躍した越前裁きで有名な大岡忠相^{ただすけ}の大岡家とは親戚筋に当たるが、岩槻城主として通算17代目となる忠光までは、一旗本に過ぎなかった。その忠光が一躍、城持ち大名にまで出世したのはには訳がある。9代将軍となる家重の小姓となったのが運の尽き初めで、家重が将軍職を継ぐと上総勝浦藩1万石の大名に取り立てられ、その後も加増が続き1756年（宝暦6年）に2万石で岩槻城主となった。その出



9代将軍家重の取り次ぎ役として出世した大岡忠光の墓（龍門寺）

世には、9代将軍家重との関係が多いに影響している。

というのは、家重は言語に障害があり、老中など幕政を預かる者たちにとって家重の言葉は理解できなかった。ただ一人理解できたのが小姓から仕えていた忠光で、家重と幕閣との取り次ぎを一手に引き受けていたのである。将軍の言葉を自分の意のままに伝えることができたにもかかわらず、また老中をもしのぐ権勢を持っていても決して奢らず、政治の前面には出なかったという。忠光の岩槻治世はわずか5年で幕を閉じるが、大岡家の城主時代は8代115年も続き、歴代城主家の最長を記録して明治まで続いた。

日光社参の行列を困らせた槍返しの門

最後に、岩槻城は将軍家の日光社参では、重要な役割を果たしている。江戸時代に社参が行われたのは都合18回で、このうち15回は2代将軍秀忠から4代将軍家綱の時代に集中した。最初に行われたのは日光東照宮が竣工した1617年（元和3年）のことで秀忠が社参、以後3代将軍家光の時代には10回にわたり、1843年（天保14年）の12代将軍家慶が最後となる。通常のルートは江戸城を発つと日光御成道を通り、その日は岩槻城で宿泊。2日目は幸手宿から日光街道に入り古河城で宿泊、さらに宇都宮城に泊まった後、4日目に日光に到着した。飯山氏によると、行列の速度は、岩槻まで時速4.5キロで進み、その先の古河までは時速6.5キロに早まっていたと言う。何を持って計っていたのかは不明だが、「おそらく尺時計というものを持っていたのかもしれない。行列の供をした旗本の記録に細かく時間が記された資料があり、正確に休憩場所や宿泊先までの時間を計測していたのだろう」と話す。また帰路も宇都宮と古河、岩槻でそれぞれ一泊して帰城したが、時には壬生



浄安寺の山門。日光社参の時に、行列の槍が屋根に掛かった「槍返しの門」と伝わる

城（現在の栃木県下都賀郡壬生町）に宿泊することもあった。18回の日光社参を通して、壬生城を除いてこの3城が定宿だが、岩槻城主は特に往路で大役を果たしている。

江戸城を出た将軍は、本郷追分から岩淵（現在の東京都北区）に達し、そこから荒川を渡って川口宿の錫杖寺（川口市本町）で昼餉（昼食）となるが、代々の岩槻城主は門前の入り口で将軍を迎えるのが通例だった。その後すぐに岩槻城にとって返し、宿泊のための最終確認をして、将軍一行が到着するのを待つという大役を果たしている。18回行われた日光社参で、1728年（享保13年）の8代将軍吉宗の時代に、ある事件が起きた。錫杖寺まで出迎えたのは永井伊豆守直陳で、門前でお目見えした後、直ちに岩槻城に帰参。夕方5時ごろ、岩槻に到着した一行に加わって城外から城内に入ろうとした時、行列の先頭に行く槍が門に引っ掛かり、立てたまま通ることができなかったという。

当時、城下への出入口には市宿口や諏訪小路口、林道口などに木戸門が設けられていて、それぞれに番所が置かれていたが、行列はこのうちの田中口という木戸門から入ることになった。しかし、この木戸門は他の門よりも屋根がある立派な造りで、町民にとって誇りの門だったが、槍頭の武士は「不届き千番。屋根を取り壊してしまえ」と壊そうとしたと

言う。その場にいた直陳は「今ある屋根を壊すことはない。槍を倒して通れ」と槍頭に命じたが、「槍を返す（倒す）とは何事か。将軍の威光を何と心得る」と反論。それでも直陳は怯まず、屋根を壊すことを拒んだため、行列は槍を倒して木戸門を通ったと言われている。この一件以来、城下の町民は田中口の木戸門を『槍返しの門』と、親しみをこめて呼ぶようになったという。

数々の伝説に包まれた岩槻城。まだまだ他にも言い伝えはあるが、築城から明治維新での廃城までを振り返りながら、その時々々の伝説を抜書してみた。現在、城址公園として整備されている岩槻城は、観光資源として十分に活用できるものだが、残念ながらあまり注目されていないような気がする。土産物や食べ物など観光の付加価値を高めながら、この岩槻城の物語を県内外に強く発信、地域経済をより活性化させことはできないものだろうか。（了）



日光社参の時に岩槻城主が将軍一行を出迎えた錫杖寺（川口市本町）

主な参考、引用文献

「埼玉の城址30選」（西野博道編著、埼玉新聞社2005年）、「続・埼玉の城址30選」（同、2008年）、「岩槻城と城下町」（岩槻市教育委員会、さいたま市立博物館、2005年）、「岩槻市史（通史）、市史編纂室、1985年」、「岩槻藩の殿さま～大名家の変遷280年～」(さいたま市立博物館、2013年)